

第2回将来計画策定有識者会議 議事要旨

日時：令和2年11月27日（金）午後2時から午後4時

場所：3号館2階3201教室

出席者：(委員) 森迫委員、内海委員、矢島委員、綾城委員（平田代理）、中本委員、杉山委員、錦織委員（リモート参加）、長島委員、伊東委員、大槻委員、坂根委員、井口委員、矢口委員、山本委員、岡本委員、西田委員
(福知山市) 渡辺市長公室長、岸本大学政策課長、井上係長、倉主事
(事務局) 内田グループマネージャー、荻野アシスタントマネージャー、神代

1. 資料

- 第2回福知山公立大学将来計画策定有識者会議 次第
- 福知山公立大学将来計画（案）（資料1）
- 教育研究環境の充実について（資料2）
- 福知山公立大学将来計画策定有識者会議 委員名簿
- 福知山公立大学将来計画策定有識者会議設置の趣旨
- 第1回将来計画策定有識者会議 議事要旨

2. 会議・議事概要

(1) 開会挨拶

- 森迫座長より挨拶

(2) 議事

①教育研究の充実について

井口委員より説明。

(委員)

- 人材育成において、AO入試（総合型選抜入試）は、一般入試では測ることができないモチベーションの高い学生確保の観点から、大学のアドミッション・ポリシーの中で検討をしてほしい。
- AO入試は、近隣の学校からも要請がある。北部の高校の多くは、探究活動で地域をテーマに取り組んでいる。地域経営学部はそれに合致した部分があるため、是非検討頂きたい。
- 入学者選抜は、AO入試・学校推薦型選抜入試・共通入学テストの順序となっており、早い段階で意識の高い学生の入学を促すことが必要である。

(委員)

- 高校現場で困っているのは探究活動である。探究活動は、調べ学習で終わっているのが現実であり、福知山公立大学からも支援を受けているが、どうやって深化させていくかが課題となっている。引き続き大学との連携が必要である。
- 本校から福知山公立大学に進学した学生に、探究活動の支援に来てもらい、大学生の観点で、高校生に適切なアドバイスを頂いている。このような連携が、高大連携システムとしてあれば、福知山公立大学を目指す生徒が増え、入学者増に繋がるのではないかと考える。
⇒総合型選抜入試では中退率や成績などの課題もあるが、京都工芸繊維大学では、ダビンチ入試（総合型選抜入試）を行っている。AO入試の導入は、現時点では難しい面があるが、他大

学との情報交換等をしなが、今後の検討課題としたいところである。

(委員)

- 国公立大学のAO入試による中退率は低いと言われている。データ分析の仕方によるものであることを補足する。

(座長)

- 京都工芸繊維大学はダビンチ入試を10年以上行っている。これまでの学生の成績は、他の入試と遜色なく、概ね同じ水準になっている。これは入りたいと思う大学、学びたい内容であったためと推察している。
- 地域創生Tech Programは、定員通り埋まっていない。しっかりと選抜をして、そのレベルを満たしてもらう必要がある。定員通りが必ずしも入学とはしていない。大学で習得レベルの準備ができていることを確認している。
- 総合型選抜入試には、AO入試だけでなく学校推薦選抜型入試がある。京都工芸繊維大学の地域枠の学生では、令和2年度から京都北部の学生に対して、大学共通テストを受けた点数をもって総合型選抜入試の対象とする方法をとることになっている。やる気も大事であるが、ダビンチ入試でも成績をしっかり見ることにしている。
- ダビンチ入試は大学共通テストを使用しないが、学校選抜推薦は大学共通テストを使用し、前学期試験の前に合格者を出すこととしている。
- 100人の学生をとると、1番と100番の学生には大きな差がある。しかし、色々な入試を実施することで、学び方の違いや特性が刺激し合うネタができる。これが大事である。
- 18歳人口が減少している。必然的に成績が上の方から埋まってくるため、受験者のレベルは徐々に下がってくる。下がってくる学生をいかに上手く卒業に向けていくかが大事である。彼らが社会人になって、大学で学んだことをベースにした思考ができるようになってくるかに重点を置いた教育に変えていかなければならない。成績の良い学生を取りたいという考えだけでは、選べる大学にはならないと考えている。

(委員)

- 出口戦略について、福知山市には、福知山公立大学の地域経営学部と情報学部、京都工芸繊維大学福知山キャンパスの文系と理系の両方がある。地域との企業との接点を増やしていければと考えている。理系があるため、大学の研究開発の中で企業の接点を持つていくことも検討いただきたい。地方大学だからこそのローカル視点は、他の大学では学ぶことができないメリットであることを学生に感じてもらいたい。また、卒業後、福知山に残らなくても、それぞれの地元に戻って、ローカリスト視点で力を発揮してもらえる学生が育ってもらえたら良いと考えている。

(委員)

- 全体的な計画や構想は良いと考えている。前回は、DX（デジタルトランスフォーメーション）の話を見せてもらった。これは単なるデジタル化を表したのではなく、「経営革新×デジタル」という概念になっている。福知山公立大学は、経営とデジタルの両方を持っているため、これに合致して進めることができると考えている。
- 地域経営と情報の両方を分かっている人間が必要である。どこに軸足を置いて、専門性を高めていくかが大事なところである。今後、大学がDXを考えたときに、両方をまとめるような基礎的な学びや連携研究が今現状できているのか、今後見込みあるのかを聞きたい。

⇒情報学部の視点では、まだ1年生が入ったところであり、社会に貢献できるレベルには達していない。ただし、教員は福知山市に限らず行政機関から多くの相談を受けている。スタートアップからの相談を受けており、教員が依頼を受けて、PBLの中で新入生を鍛えながら形を作っていくという取り組みができるという手応えを感じている。

⇒意見は我々の考え方と大きな隔たりはないと考えている。入学者選抜制度についても、取り組むことができる課題であると考えている。地域の企業との接点は、成果はまだ見えてきていないが、少しずつ始まっているところ。地域経営学部で情報教育が求められている点は、どのような技術や教育が必要なのかを含め、地域経営学部と情報学部の意見を十分聞きながら、これから深化させていきたい。

(座長)

- 文理融合には経営と情報とある程度理解し、2学部共通で学べる話がまずは必要であるということによろしいか。

⇒2020年カリキュラムの中で、福知山市の地理や文化、歴史など地域理解科目を共通科目として設定している。地域経営学の学術にはいくつかの分野があり、重要な構成分野に情報学がある。地域を理解するには、地域のデータをしっかり捉え、分析し、何を示しているかを理解することが大事である。情報学部についても、地域への貢献を前提に設置しているため、データを踏まえながら、現場で何が必要なかを意識していきたい。

(委員)

- 特にこれからAIが大事であると考えている。AIで何ができ、どこまで導き出せるのかが、はっきりと分からない。プログラムまでは必要としないかもしれないが、文系の人もAIで何が出来るかまでは学んだ方が良いのではないかと考える。

⇒AIに関して、社会では具体的に何ができ、どこまで進められるかというところは、実感として掴みにくい。これが、経営陣がAI導入に踏み込めない障壁になっているのではないかと考えている。

⇒情報学部としての貢献は、プロトタイプを作ることができる学生の育成に重点を置いているところである。小さくてもよいのでAIで動くものを見ることで、理解が進み、具体的なプランを作ることに繋がっていくと実感している。仮にAIを使わなくても、従来のITにAIを導入すると、何が出来るかを検討することで、かなり具体的に理解してもらえる。このようなプロセスに貢献できる学生の育成に重点を置いている。

(座長)

- ビッグデータなどデータはたくさんあり、AIでどう処理するかであるが、現在の私の理解であれば、最適化するイメージとして、評価関数をどう設計し、その評価関数の元だとどのような結果だというようなプロセスに近いと考えている。

⇒AIで一番難しいのは、教科書と現実に大きなギャップがあることである。教科書で学んだことが、どの程度実装できるかが問題である。意見のあった工学のプロセスも共通しているところがある。社会で一番で困っているのは、AIで所期の成果があげられる範囲であり、そこを押さえておかなければ、痛い目に合う。我々が貢献するのはその部分である。

(座長)

- 経営者でも経営判断をするときに、結果だけを見てよし悪しを判断できない。どうやって判断するのかという部分を、例えば文理融合でいうと、文系が経営を担うことに貢献し、理系

がプロセスを絞っていくことに貢献していくことで、双方がより良くなっていくことだと理解している。それを目指してもらいたい。

(委員)

- 公立大学の設置者は、福知山市である。市民のための大学であり、京都北部のための大学である。地域のための課題解決に尽きると考えている。
- ものづくり人材を育てていただきたい。男性だけでなく、ものづくりに携わる女性の人材を育ててもらいたい。
- 地域企業との共同研究や共同開発、社会人の再教育が課題であると考えている。地域のための人を育てるとなると、地域の高校生の枠を広げる必要がある。外に出ていく人ばかりを育てることは、問題であると考えている。
- 将来的には公的事業を目指すという提案があった。これから発展すれば非常に素晴らしい大学になると考えている。

(委員)

- 設置者としては、大学の研究の方向性には興味を持っているところである。地域協働型教育研究は、両学部とも実施することは大事である。ものづくりや農業などがある中で、地域に入り、何が問題で何が解決できずに困っているのかに踏み込んでもらいたい。地域経営学部や情報学部の力を出して、課題の大部分が解決にまで繋がると、課題解決や地域協働型教育研究の見える化になると考えている。行政としても協力できることはしっかりやっていきたい。

②教育研究環境の整備について

事務局より説明。

(座長)

- 実施しなければならない整備が目白押しである。設置者側の財政状況も厳しい状況であると推測する。大学としての施設整備計画がかなり具体的に述べられたが、これで十分であるとは考えていない。
- 教育研究の面では、例えば、情報学部はPBLを積極的に展開している。PBLは授業時間内で全て終わるわけではない。最近の大学は、学生同士が協議や議論をする場であるラーニングコモンズが必要である。学生同士が切磋琢磨し、協議する場がなければ、必ず確保していかないといけない。大学に来て、授業だけで終わるものではない。本来であれば必要な内容ではないか。
- 今回の計画で、どの程度手当できるかは別問題であるが、目指すものは入れておくべきである。
- PBLの実施場所や地域との共同研究の打ち合わせ場所の話もある。情報学部だけがやるのではなく、地域経営学部と一緒にできるという雰囲気、文理融合の大学ができて期待される面で、知恵を出し合う必要があるのではないか。
- せっかく新設の大学なので、ここはできているという記載は欲しいと考えている。

(委員)

- PBLを実施すると、テーマごとに備品や鍵付きのロッカーなどが必要となる。
- ラーニングコモンズも意見の通りで、舞鶴工業高等専門学校では、空いている場所を探し、

学生と教員が設計して、学生にとっては居心地が良い場所を創った。新設ができないのであれば、手作り感のあるものもあり得ると考えている。

- 知の拠点というキャンパスの一体感をどう感じられるかということである。アクセス道路にバスが通っており、大学に駐車場があるというのは、多くの大学に当てはまるのではないか。もう少しキャンパスとの一体化があればと考える。ここで学んでみたいという学びの中身も大事であるが、高校生や地域の方が夢や希望が持てるように感じさせる一体感のある整備が少しずつでも必要ではないか。
- アクセス道路や駐車場に関しても、丹後方面から通うとなると、公共の鉄道の利用が非常に難しいため、自家用車で通学もしくは下宿となる。丹後の学生が来る際は、しっかりと駐車場を確保することが必要と考える。

⇒全てを新設するとなれば、財政状況や立地の場所もあるため、少しずつ詰めていく必要がある。既存施設を上手く使うというマネジメントの考え方もある。視野を広げて、将来的には作るとしても、当面整備できなければ、どう上手く使う方法があるのかを考えていく必要がある。一か所に集中しなくても良いのではないかと考えられる。整備の優先順位や既存施設の活用の両方が収まる方法がないのかを、データ等を検証しながら、一つずつ協議をしていかなければ、すぐに整備できるというものではない。何もやらないということではなく、できるところから詰めていきたい。

(委員)

- 京都工業繊維大学福知山キャンパス部分で大学の力を借りながら、ハード・ソフト面でのより一層の連携強化はできないものか。例えば、建物の相互利用や教員免許更新講習の会場、教員免許の更新なども連携できればと考える。

(座長)

- 有効利用ということで、協議をすることはやぶさかではない。ただし、国立大学の厳しい状況を鑑みて、本学のカリキュラム上も含めて、大学全体としても事務方ともよく相談する必要がある。年数が経てば、双方の学生が共同で何かするというのも視野になかった訳ではない。これらを踏まえて総合的に今後、考えていくことになる。

(委員)

- 市道荒木神社堀線において、治水対策として調整池を整備している。堤防道路を使いながら大学へのアクセス道路を整備する方向で用地買収等を進めている。福知山駅からのバスによるアクセスなども今後考えられる。
- 駐車場については場所の確保が必要であるが、駐車場がなければバス交通で運び、車でお越しの方は、バスでという対応が考えられる。運用上の対応は場合によっては考えられる。
- あるものを有効活用する点では、福知山市では小学校の廃校舎におけるサウンディングツアーを実施している。市街地周辺部で13校程度廃校舎があるが、例えば、まちかどキャンパスの郊外版のような活用も含めて、必要な部分の確保を検討できるのではないか。

③意見交換

(大学)

- 地域協働型教育研究で地域に入ってということは、口で言うのは易しいが、地域に入ることは簡単なことではない。本当のところは、対象地域を絞り数年かけて同じ場所で、地域社会と協

働で問題を探るために語り合うなど、時間をかけなければ見えてこないものである。この4年間の営みの中で、少しそれに近づいた地域は一つか二つは出てきている。

(大学)

- 東日本大震災の被災地では、10年経った現在でも地域に入ることができていない。地域に10年20年住んでいなければ、本音は言ってくれない。よそ者として、違った方向でアプローチすることも必要である。これらのことを既に実践された上で、今のような感触を得られているはずである。
- 国内外での調査をしてきたが、地域が持っているポテンシャルについて、IT産業がないところで、急にIoTといっても無理な話である。地域の中核となる企業は何か、地域で一番付加価値を付け、一番外からお金を持ってくる企業や産業は何かということは、地域経営の部分である。文理揃っているので、福知山公立大学が最も得意なところが、セールスポイントになるのではないかと考えている。

(委員)

- 現状、福知山市と大学が社会課題に向けて、自由な発想で行う取り組みは、どの程度あるのか。
⇒市が新しい総合計画を立てる際にも、残念ながら組織的な大学との連携はないのが現状である。個別の先生が委員になって入る従来型のやり方のみである。
⇒いくつかの大学では、市が大学に研究費を出し、研究課題を与え、それに大学が応えていくということをやっている大学もある。市と大学の擦り合わせは今後の課題である。

(委員)

- 一度にはできないと考えている。大学の力を借りて、災害時の避難者データの確認を行うなど始まったところである。それを広げながら、大きな課題をどうしていくかは今後協議をしていきたい。

(委員)

- 近畿経済産業局でも「地方創生☆政策アイデアコンテスト」を毎年実施している。地域の方の色々な提案が出されている。良いアイデアであれば、地域の人にヒアリングやアンケートを取り、フィードバックしながら検証していくことが入っている。公立大学であるため、市へのアプローチもしやすい。お金をかけずに色々な取り組みのヒントになるのではないかと。
⇒勉強させていただく。

(委員)

- 市との連携であるが、企業や産業のスタートアップ事業を令和3年度から始めるための協議が始まっている。どのような企業をスタートアップさせるかは今後であるが、3か年程度の計画を予定している。地域経営学や情報学、データサイエンスを活用することにより、福知山での新しい産業の創出やこれまでITや経営技術を意識していなかった企業が、これらを意識して育っていくことは、本学の目指すところの一つである。
⇒市と大学が応えていくことが地域協働型教育研究の一つである。

(大学)

- 情報学部のリソースが小さく、教員17人で1年次の学生しかいない。オーバーヘッドを一番小さくすることに重点を置いている。社会との共同研究は成功することが一番重要であるため、かなり絞って行っている。これまでの成功事例は、防災関係への情報技術の取り組みで、かなり先進的なことができています。市の顧問（危機管理アドバイザー）からの非常に大きな貢

献を頂き、成果が出た。防災は非常に重い課題であるため、成功しなければ、信用を失うことになるので、どこから始めるのかに力を注いだ。

- ラーニングアナリティクスでは、教育委員会のGIGAスクールで学校にタブレットを配り、得られるデータを分析し、市民にフィードバックを行う道筋をつけている。教育委員会と非常に緊密な関係をもって、着実な進歩を見せている。
- 共同研究は、縁があったところからスタートしていきたいと考えている。無理に始めるとロスが大きくなるため、かなり絞って取り組みたいと考えている。

(委員)

- 企業側としてもしっかりと勉強して、情報学部があることで、企業にどのような応用ができるかを勉強していく必要がある。大学院ができることにより、優秀な学生が地域に出てくることを期待している。社会人学生の勉強の場や市民の講義を聴く場などを充実させることで地域との密着が増えてくると考えている。社会人学生に対する取り組みも考えていただけたらと思っている。

⇒情報学部は、完全にオープンな姿勢をとっている。自由に来ていただいて、縁ができそうなところから発展させていこうという姿勢である。社会人学生は歓迎している。入学試験や授業料などの制度上の障壁はあるが、自由に来ていただけたらと考えている。

(委員)

- 福知山という地域は課題先進地域と言えると考えられる。限界集落や消滅する村という表現がある中で、福知山はそうではなくて、このままいくとかなり暗い未来があるかもしれないが、行政と事業者など色々な方が官民一緒に頑張ればなんとかなると考えている。
- 国家全体だけでなく、この地域もぎりぎりのところにいる。福知山の人間ではないが、ここを気に入って、12年くらいいる。その要因の一つとして、ぎりぎり頑張ればなんとかなる良いところであると考えている。
- 経営者として考えることは、まず問題や課題が最初にあり、どう解決するかは次にくる。商売で言えば、社会やお客様の課題をどう解決していくのかを最初に考え、ソリューションは後から考えていくという話である。ソリューションをどうやるかと言えば、ソリューションを考えられる人材のために公立大学を設置して、市がお金を出して、中長期的な教育を行っていく。
- 活躍している人の共通点を考えたときに、文系だから数学をやらない、理系だから歴史をやらないと言わないの方が活躍していると考えている。
- 公立大学には、文系と理系の学部があるが、できれば、文系学部でも数学を勉強してもらいたい。理系学部でも文系の歴史や文学などを学んでももらいたい。

(委員)

- 府は地元の高校生が公立大学に進学していただいて地元に戻元するということを大前提で頑張っている。地元の方々が、色々な都合で地元に戻ってきてくれる訳ではないので、いかに中丹地域を世の中に認知してもらい、入ってくる人を増やすという関係人口・交流人口を増やす取り組みを進めている。
- 学生を育てる中で、地域のためや公務員就職のためということもあるが、日本や世界で活躍する人材を育て、その人が福知山で勉強して、文化を知って、戻ってきてもらえる人材になると考えている。外へ出ていく人材をどんどん作っていくことで、人材の循環の中に入れてもらいたい。

- 地域に入り、フィールドとしてやって頂くことはありがたい。我々も産官学で連携して取り組んでいくことをやっている。地域を知り、地域で活動することは非常に重要なことのひとつであるが、大学と我々が連携することは企業も同じであるが、自分たちの持っていない技術や情報、日本や世界と繋がっている端末にアクセスするために、我々は大学と連携している。日本や世界の高いレベルからのアドバイスを頂きたい。高いレベルだからこそアクセスするという点もあるため、フィールドを福知山にすることは大事であるが、日本や世界の大きなフィールドに目を向けることも非常に必要なことだと考えている。

(座長)

- 本日いただいた意見等は、福知山公立大学将来計画に反映してもらいたいと考えている。

(委員)

- 福知山市と大学が関係を結んでいくことについて、先進諸国が抱えている問題では、少子高齢や安全安心、環境エネルギーの3つがある。地域の需要に応じて顕在化しており、福知山であれば、防災では川であり、大学は福知山市にかなりの委員を出されている。舞鶴工業高等専門学校では、教員80人弱であるが、舞鶴市に20人から30人が委員になっている。委員になっているだけでは駄目で、ときどき、情報共有する場を作っている。定期的に報告するという強い繋がりにすると、上手くいかないため、何かの時に自由に発言できる緩い場が大事である。
- その場には、企業の方が自由に入れるようにする。全体的に緩い繋がりを持つと、福知山市と大学にもどこかの企業のグループのブリッジになる人が出てくるはずである。ブリッジになる人が、ニーズとシーズのマッチングができる機運を醸成する雰囲気を作っていくことが大事である。なるべく市内で結びつけると、そこでPBL等をやっても無理がなく上手くいく。そのようなことをされると、上手くいくのではないかと考える。
- 福知山で資源をもって、市がバックアップしていく。そのようなことをやっていけばよいと考えている。

(座長)

- 大学が福知山の土地にあることは事実である。大学生は情報の一つのハブである。それがある福知山市はハブをいかに上手く活かして、日本中あるいは世界中の情報が流れていくチャンスを持っている。大学の中で閉じないことが重要である。

次回開催

日時：令和2年12月17日（木）14時～16時

場所：福知山公立大学3号館2階3201教室